

特集●政治・文化からみた新たな中米関係

新たな戦後史を参照枠として共有し、アジア、そして、世界のいまを考える

一九九三年から二〇一〇年まで『現代思想』編集長を務めた池上善彦氏に、インタール・アジア・カルチュラル・スタディーズ・ソサエティをはじめ、退任後のアジアでの精力的な活動内容を紹介しながら、来たるべき知の枠組み、基盤について語っていただいた。話は、戦後アジア史研究に関する新たな動向から、アメリカを背景にした日中関係、そして、世界が抱える課題、特に原発問題や民主化運動へと展開した。

池上善彦（『現代思想』元編集長）

インタビュー

川村亜樹（愛知大学現代中国学部准教授）

『現代思想』を振り返って

——『現代思想』を振り返っていただけますでしょうか。

池上 僕が『現代思想』の編集に携わったのは、一九九一年から二〇一〇年の二十年間です。そのとき脱冷戦とか、新自

由主義とか、いくつか特集の柱がありました。今、新自由主義というと、中学生でも知っていますが、『現代思想』で新自由主義の話をしたのは一九九七年ぐらいの早い時期です。あともう一つはカルチュラル・スタディーズです。科学関係のさまざまな特集も組みました。それから、ポストコロニアル。ポストコロ

ニアルという特集を組んだことはないのですが、サイードの特集はあります。そのなかで、どうしてもやらなくてはならない問題がいくつか出てきて、その最大のものがアジアでした。具体的に言えば韓国や中国です。さらに言えば、慰安婦問題などです。

——それは植民地主義につながっていく

のでしょうか。

池上 そうなのですが、最初はどう扱っているのかよく分かりませんでした。とにかく問題があつて、具体的には教科書問題や慰安婦の証言です。最初はやはり植民地問題で、その次に戦争の記憶みたいなものです。国内だけで終わればよかったのですが、グローバル社会ですから、韓国人をはじめ、二〇〇〇年代からは中国人、東南アジア人、台湾人が具体的に目の前に現れてきて、彼らと対話をするようになりました。

アジアとの出会い

池上 一九九六年に、台湾の陳光興と東京外国語大学のシンポジウムで一緒にあったのです。

——陳光興。

池上 僕は編集者としてシンポジウムを聴きに行き、客席から質問したのです。何を質問したのかは全然覚えていませんが、そのあと彼が僕に声を掛けてくれました。質問が気に入ったのかどうかはよく分

かりませんが、そのようにして知り合い、友人になったのです。翌九七年に台湾に呼ばれたのですが、いつ行ったのかというと、なんと二月二八日です。

——二月二八日。

池上 一九四七年に衝突があり何人かが虐殺されたという、台湾にとつてはとても大変な日です。侯孝賢監督の『悲情城市』という映画で描かれた二・二八事件です。台湾にとつて非常に重要な事件ですが、それまで私は全然知りませんでした。それが九七年のことです。彼がそのときに提案をしました。アジア、いや、東アジアにおいてさえ、お互い何も知らない。日本は、知っているようで、韓国のことも中国のことも台湾のことも知らない。逆に台湾人も、日本のことを知っているようで知らない。それを打破するために雑誌を作らないかというのです。何語で、という感じです。そのときは夢のような話でしたが、彼は本当に二〇〇〇年に『インターアジア・カルチュラル・スタディーズ』を作りました。

——『インターアジア・カルチュラル・

スタディーズ』。

池上 世界的に販売しています。創刊してからもう十年以上になります。それから、成蹊大学で教えている韓国人の研究者と知り合つて、文富軾とか、韓国の知識人をたくさん紹介してもらいました。

——文富軾。

池上 一九八一年に光州事件があつて、その事件に刺激されて、釜山のアメリカ文化院に放火をした人です。

——テロリストですか。

池上 逮捕されて一旦は死刑判決を受けています。彼は韓国で『当代批評』という雑誌の編集長をしていました。他にも、『創作と批評』をご存じですか。

——『創作と批評』。

池上 韓国で有名な、民主化時代の一六〇年代から弾圧されてきた、日本で言ったらまさに岩波書店の『世界』です。その編集者も紹介してもらいました。韓国には民主化されたのちの二〇〇〇年、金大中政権の頃に行きました。それから、今はもう亡くなられましたが、溝口雄三さんを紹介してもらいました。

九七年ごろに「日中・知の共同体」というのがありましてね。

——日中・知の共同体。

池上 北京や東京などいくつかの場所
で、知識人同士が今の問題を話し合う機会も設けられました。そのなかで、二〇〇〇年に福岡で中国の孫歌と知り合いになりました。当時、九州大学に毛利嘉孝くんがいて、カルチュラル・スタディーズのかなり大きな会議、インタージャ・カルチュラル・スタディーズの第一回があったのです。東アジアを主として、アジアのほぼ全域、さらには、アメリカやオーストラリアからも参加者がいました。

それをもとに、陳光興は雑誌を作りました。彼は英語と中国語ができますから、東アジアは大体カバーできます。中国人と直接いろいろな話ができて面白かったです。それまでの『現代思想』は、たとえば、デリダやドゥルーズ、アメリカだとサイードやスピヴァクを載せていました。それが、当時の号を読むと分かりますが、徐々にリアルタイムの韓

国人、中国人、台湾人が、数多く登場するようになっています。彼らの抱える問題について、聞けば普通のことなのですが、日本によるアジアへの関心とかなりズレがある気がしました。日本の中国ウォッチャーによる、中国の問題についての解説とは全然違うのです。

植民地主義、日本の説明責任

——現場とのズレみたいなものですか。

池上 そうです。どちらがいいというわけではありませんが、役割は全然違います。日本の場合は、アジアというと、歴史否定主義は論外として、植民地の話になります。植民地時代にどうだったのかということはとても重要な話ですが、アジアの人と話していると、また違うのです。彼らには今の問題があるのです。

——ポスト植民地主義があり、ポストの部分を除々に変化しているという感じですか。

池上 そうです、ただ、それがポストに見えないのです。

——ずっと断絶せず、変化しているということでしょうか。

池上 変化しながら、現在の問題なのです。

——つながっているのですね。

池上 今、あの開発をどのように止めたらいのか、あの大統領をどのように批判したらいいのかという問題です。とても興味深いですが、徐々に見方が変わってくるのですが、その際、問題が二つあって、一つは、日本をどう説明するのかという問題です。たとえば、日本には、教科書を作る会とか、南京虐殺はなかったとかいう人々がいますよね。あるいは、原発問題に関連して、なぜ原爆を落とされたのに日本には五〇基以上もあるのか、日本では社会運動がたくさんあるのに、なぜ政治は変わらないのか、左翼はたくさんいるのに、なぜよくならないのかなど、さまざまあるわけです。そういう問いに答ええないといけないのですが、ポストコロナルの知識だけでは無理なのです。戦後、日本人が何もしなかったわけではありません。日本はその六〇年

間の説明を求められているのです。たとえば、日本語ができる孫歌は、日本には竹内好や丸山眞男などの優れた思想があるので、アジアだけではなく西洋に向けても盛んに翻訳し、世界中で勉強して生かすべきだと言っています。

—— 外側からという言い方はおかしいのかもしれないが、もう一度、言い直すという感じでしょうか。

池上 日本で竹内好を称賛する人は、五〇年代からずっといましたし、今でもかなりいます。彼らの竹内好と、外から見ただ竹内はズレるのです。

—— 無意識の部分が、何かしら、ちょっと垣間見えるのですね。

池上 そのところを説明しなければなりません。竹内好は日本にとつてこういう意味があつて、アジアではこういう具合になつて、世界的にはこういうことになりますよ。それが異なるのは別として、そのように見なければ、説明したことはないかもしれません。全共闘でも安保反対闘争でも、何でもいいのですが、日本では当たり前の話として、僕らが漠然と

知っていること、それをそのまま言つてもあまり意味がないのです。他のアジアとの関わりで見なければなりません。

—— コンテキストの問題になるのですね。

池上 外に向けて、具体的にはアジアに向けて、日本のことを説明しようとする、とても工夫することになります。この工夫を、ほとんどの人はあまり考えたことがなかったのですが、それが面白いです。日本が植民地でおこなったことについては、いい研究がたくさんあります。多くの人が関心を持つていることはとても素晴らしいことです。ただそれが政治的にあまり生かされていないのは残念です。いい研究者、頑張っている人、断固抵抗している人もたくさんいますが、外から見ると、日本のそんなところは見えないのです。そこを説明しなければなりません。一九四五年まではどうだったのかということもありますが、四五年から二〇一四年までの七〇年間はどうかだったのかを、現代史を説明する方法がないのです。部分的にはあつても、誰もしない。

—— 連携がないなかで、研究者が自分の政治的信念などに基づいて、バラバラに研究している、という感じでしょうか。

池上 部分的に、全共闘にやたら詳しいとか、都市の音楽についてとても詳しいとか、そういう研究は数多くあります。このことに気付きだしたのが二〇〇〇年なのですが、それを外に向けてきちんと発信してくれる学者があまりいませんでした。これは日本だけではなく、中国、韓国、台湾でも同じです。

—— 学者は学者なんですかね。

池上 こういう歴史があつて、今、こういう段階にいるという説明がお互いになるのです。今はバラバラですが、日本はアジア全域を植民地化する戦争をしました。韓国、台湾には三〇年、四〇年にわたつて植民して、中国では十数年も戦争をしたのだから、緊密に関係し合っています。関係し合っているということは、さまざまな本にも書いてあると思います。が、では、現在、何か共有できるものがあるかといえば、あまりありません。たとえば、鳩山由紀夫の東アジア共同体で

もいいのですが、政治的に平和になるといいなという程度で、具体的なものはあまりない。もちろん、FTAなど経済連携に関するものはあります。でも、国家同士ではなくて、民間でも、知識人同士でも活動家同士でも普通の市民でもいいですが、チャンネルがありません。

東アジア批判的雑誌会議、沖縄

池上 七〇年代ごろからアジアでネットワークを作ろうという運動はいくつかありました。特に左派の間でいくつかあります。二〇〇六年頃から、そういうことをやりたいと徐々に思うようになってきました。ちょうどそのころ、韓国の『創作と批評』という雑誌が主催して、ソウルで東アジア批判的雑誌会議が開催されました。雑誌というのは、あらゆる知識人、活動家をストックしています。著者同士だと、たとえば、文学や歴史や政治と、専門分野ごとになりますが、雑誌ならば全部揃っているの、雑誌同士でつながるのが一番いいのではないかという

発想です。これは台湾の陳光興の発想でもあるし、『創作と批評』の今の編集長白永瑞の発想でもあつて面白いです。二〇〇六年には、最初に『現代思想』

『世界』『インパクション』、今はなき『前夜』、それと、沖縄の市民運動の小雑誌『けーし風』が日本から参加しました。韓国や中国などからも数誌来しました。一番面白かったのは、『現代思想』でも『世界』でも、中国の雑誌でもなく、沖縄でした。沖縄は、米軍基地の話で、日本なんだけれども日本とはちよつと違う歴史的経緯があつて、今、大変な目に遭っているという話をしたら、参加していた東アジアの人はみな驚いていました。

——それは驚きですね。

池上 みなほとんど知らないのです。

——海外、特に中国などから沖縄への旅行者は最近多いと思いますが、やはり、一般的な感覚だと単なる観光地でしかないのでしょうか。

池上 狭い所ですから、うろろろすれば米軍基地などが目に入りますが、日本は

アメリカの支配下にあるから基地もあるだろうということで、深くは考えないでしょう。朝鮮半島は南北に分断され、中国は台湾と中国大陆の問題があつて、日本には沖縄と日本の問題があるのではないかという感じです。そういう捉え方がいいかどうかは別ですよ。

民主化、抗日

——日本と沖縄という言い方は、とても勇気が要る使い方だと思います。

池上 そんな感じで、僕らも逆に台湾の問題に気がきます。日本は韓国も植民地化しましたが、韓国・台湾だけでなく、中国にしても、日本軍が引き上げたあと、ポストコロナルといつてもいいですが、脱植民地化の過程があることに気がきます。中国の場合は革命で、韓国と台湾の場合は民主化です。たとえば、韓国は朝鮮戦争があつて、独裁体制、いわゆる開発独裁になります。台湾も同じです。要するに、いわゆる民主化過程というものがあつて、それは独裁政権を批判

して民主的な国にすることです。

韓国の民主化と連帯するという運動は七〇年代からずっとありますから、そのプロセスを知っている人は、大江健三郎など、ごく少数ですが日本にもいます。なぜかという、在日朝鮮人が一生懸命に宣伝するからです。一方、台湾についてはほとんど知られていません。何をしていくか知らないでしょう。

——分らないです。

池上 韓国については、光州事件や金大中事件、あるいは、大江健三郎が何か言っていた、金芝河がいるなど、みな何となく知っています。でも台湾については誰も何も知らない。ノーマークのままいつの間にか独裁政権になっていて、気が付いたら普通の国になっていたという感じです。台湾のなかにいると、それは大問題です。独裁政権をどのように批判したのか、独裁政権の遺産、つまり、日本帝国主義の遺産がいまどうなっているのか。台湾と韓国における民主化というのは、目の前の独裁政権を倒すことです、それは同時に、日本の植民地の遺産

から脱却する過程なのです。彼らにとつて脱植民地化と民主化はまったく同じことなのに、そこが僕らには全然分からない。僕らにとつては、日本がやった植民地化の問題と、そのあとの台湾や韓国の民主化はまったく別の問題なのです。

——現在の問題もですか。

池上 日本の植民地化を引き継いだから、朴正熙はあんなに威張っていた。日本に四〇年近く植民地化されていたところから真の民主化を実現するために、目の前にいるのは日本ではなく朴正熙ですから、朴正熙を批判することでそれを遂行しようとするわけです。そのよく分からなかった過程が見えてくるんです。一番典型的なのは中国の毛沢東です。共産主義の革命はあまりにも劇的すぎて、まったく別の話になってしまっています。偉大なロシア革命を引く、マルクス、レーニン、毛沢東という流れから僕らはついつい理解しようとしています。そういう流れも、もちろんありますが、あれは要するに、抗日軍が抗日の延長線上に中国の封建制を打破し一掃しようとした

運動です。成功しているかどうかは別ですが、そういう運動が今もずっと続いているのです。だから当然、日本と中国が戦争をしたという延長戦上に彼らはいて、そのなかでいろんな問題が起きているのです。ただ、五〇年代から九〇年代の眼前の目標には日本は関係ありません。韓国でも台湾でも、こうした読み換えが必要です。

——眼前にいないだけなのですね。

池上 彼らは自分たちの民主化運動、つまり、独裁政権打倒、もしくは封建制の一掃などさまざまなことをします。制度も含めて、植民地の遺産、植民地で植え付けられた奴隷根性からどう脱するかです。たとえば、韓国で親日が問題になったりします。こういう問題は一見、日本とは何の関係もありません。でも、日本の植民地責任、戦争責任があり、それをだぶらせないとうまく理解できません。この過程が、ないとは言いませんが薄いのです。

東アジア友愛の海

——バラバラに論じられると、それではやはり不十分なのです。

池上 植民地問題で日本は悪かったという意見がたくさんあります。そして、韓国の場合、翻訳も含めて、民主化運動の本は結構たくさんあります。しかし、脱植民地化と民主化が同じことだという認識はないわけです。韓国、台湾にとっても、日本がどのように頑張ってきたのか、どこが頑張り切れていないのかというのは重要なのです。

——それが、今につながってくるのですね。

池上 日本でアメリカが何かをすれば、確実に中国も韓国も台湾も影響を受けます。だから、日本の動向は大変重要なのです。鳩山は日本での評判は悪いですが、韓国、中国、台湾ではたいへん人気があります。沖縄でもそうです。なぜ日本人は鳩山を支えず、なぜ左翼は批判するんだ、盛り上げるべきだ、という感じ

です。彼が「東アジア友愛の海」とか言う、もうみな涙ものです。

——本当はなんとかそこまでたどり着かないといけないという、ある意味で一つの希望の光を示してくれているということでしょうか。

池上 そうです。日本人があんなことを言うのは信じられないことなのです。

——だからこそ、逆に言うとも国内では反発を受けるのです。

池上 日本国内では、アメリカをどうする気だということになるのですが、東アジアでは、仲良くしようというひとこと言っただけで、みな感激するのです。

——本当は、仲良くしたいという気持ちがあったかもしれないけど、口には出さなかった。

池上 口に出さなかった。アジアって単純で複雑なものではないのです。

——ある意味、複雑で。

池上 僕は二〇〇九年の政権発足当時から、個人的には鳩山を割と好きでした。ただ、ここまでアジアで歓迎されていることは、アジアに出て初めて知りまし

た。アジアは、このように全然共有されていないのです。左派の間でも全然共有されていない。東アジア共同体とか、新しい帝国主義とか、左派の鳩山批判はものすごい。鳩山は左翼ではないので、そういうの、ゼロではありません。

平和へ向けた相互参照

——支配しようとは思っていないということですね。

池上 アジアにマルクス・レーニン主義、左派の国などありません。中国も左派ではありません。ただみなが願っているのは平和です。そして平和を乱すのは北朝鮮ではなく日本なのです。その日本の首相、リーダーが仲良くしようと言うのがどういうことか、こういう単純なことが日本ではほとんど分からないのです。

——それには、理由というか、答えはあるのですか。

池上 だから、そこを探りたいのです。要するに、植民地問題、戦後七〇年間の

各地域の努力、現在の課題。この三つをどのように結び付けていくかということがとても面白いのです。

——単純な話、ライバル視しているようなイメージがあります。

池上 きちんと向き合っている人もたくさんいると思います。そういう人が集まって、植民地期とその後の時期と現在の課題を、それぞれの地域と全体でうまく考えていかないと平和はありません。植民地研究だけでも、ポストコロナアルだけでも、現在のウォッチだけでも駄目です。この三つを組み合わせて、各地域すべてを相互参照のなかで考えることが、二〇〇〇年代後半ぐらいから中国や韓国の人たちに出会っていくなかで、重要だと感じられるようになりました。

東アジア批判的雑誌会議は、二〇〇六年のソウルに続いて、二〇〇八年に台湾の台北でおこなわれました。そのとき明確になったのが、分断体制みたいなものが東アジアにはあるということです。朝鮮半島、中国、日本。この分断体制がアメリカの影のなか、影という直接的か

もしれませんが、さまざまに複雑な様相を呈している。これをみなできちんと考えようということが、徐々に明確になってきています。たとえば、台湾に僕が行ったり、沖縄からの参加者が話をしたことで、沖縄はとても重要でアメリカに直接抵抗していると認知されています。韓国にはありますが、中国と台湾に基地はありません。アジアでは基地は稀なのです。沖縄と韓国の反基地運動の連帯はすでに十年ほど前からありました。それを東アジアとしてトータルに考えるまでになったのです。台湾では、沖縄から人が来ても、台湾のなかの議論ばかりで、それぞれに自分たちの話をして、外の人には訳の分からない話をずっとしていました。

——比較する参照枠があると、確かに何か新しいものが見えてきそうですね。池上 身近な比較です。分断といっても、朝鮮半島の分断と中国の分断は全然性質が違います。今は統合されていますがベトナムの分断も違います。それをどうやって考えていくかということでも

す。僕は政治家ではありませんから、そこから何を考えていくかというところに起点があるわけで、具体的に解決するのは外交、政治です。

——でも、見えなかった課題提起はできますね。

池上 そうすると、中国現代史でも、韓国現代史でも、台湾現代史でも、見方がまったく違ってくるわけです。たとえば、中国現代史は、革命史という名前になっていますが、面白いものも面白くないものも含めて、山のような研究があります。韓国の場合は民主化、民主運動史です。日本の場合は何か思い付きますか。ないでしょう。

——流通している言葉はなかなか思いつきません。

尖閣問題、アメリカにいた台湾人

池上 台湾を例に取り上げます。二〇一二年に尖閣問題が持ち上がり、ちょうど八月一日に石原慎太郎が、東京都が買い上げると言って、その一週間後ぐらいに、

当時首相だった野田が国有化宣言をし、八月末に大きな騒ぎになりました。その最中に僕は中国に行きました。天津に着いてタクシーに乗ったら、「お前は何人だ」と聞かれ、「日本人」と答えると、「降りろ」と言われました。実際に降ろされたことはありませんが、三度ぐらい言われました。それは別として、尖閣問題というのは、沖繩返還と同時に台湾の領土に入っているのかいないのかを最初に問題にしたのは台湾人です。ただ、台湾ではありません。台湾人でもアメリカに留学していた人たちです。ほとんどが理系の科学者で、彼らが最初にこれはおかしいと騒いだのです。それが台湾本島に飛び火して保釣運動になります。日本では尖閣と言いますが、中国語では釣魚台ですから「保釣」です。釣魚島を守る。彼らはナショナリズムで、日本に対する抗議をおこない、民主化に転化していきます。それを口実にして、愛国無罪で当時の総統蒋介石を売国奴と批判します。そのなかで、たとえば五四運

動のように、彼らとは切り離されていた中国本土でも歴史が復活します。われわれは五四運動の精神でこの保釣運動を戦っているのだとなります。台湾は反共主義ですから、それまで五四運動や魯迅、毛沢東は発禁でした。

アジアの構造

——いったん消えたものをもう一度復活させたんですね。

池上 もう一度、中国大陆と歴史を共有し直したんです。今は独立か統一かをめぐって、台湾人というカテゴリーがありますが、当時そういうものはありません。われわれは中華意識を持った同じ中国人だということです。中国共産党とまでは言えませんが。

——何となくほのめかして、お互い付き合う感じですね。

池上 ただ、五四運動といえば、共産主義とは関係ないので台湾人の心を揺さぶるわけです。それが領土問題のかたちで出てくる。五四運動といえば抗日です

し、同時に封建制打破の民主化運動でもあるわけです。だから、問題の発端は沖繩返還と領土問題ですが、抗日と民主化ということになります。日本の問題です。これがアジアと日本の関係です。台湾の民主化運動は、領土問題を発端として五四運動を呼び起こし、火が付いていったという、これがアジアの構造です。日本の植民地問題と現在の問題とが、このように結び付くのです。あらゆる場です。

——状況によって、分裂したりくついたりしながら、ずっと続いていきますね。

池上 続いてはいるけれど、台湾の場合はすぐに反共体制になっていきます。そして、五〇年代の白色テロです。要するに、左派的な者はすべて殺されるか拘束されるか、いわゆる恐怖政治みたいなものです。韓国も同じです。また、台湾では領土問題をきっかけに民主化運動にやっと転じる時、台湾独立問題になります。それまでは独立問題などなく、むしろ統一問題だったのです。蒋介石はどうやって中国大陆を統一するか。台湾だ

けが独立するなんて考えたこともありません。それはそのあとの問題です。独自の発展をして、民進党ができていく流れです。台湾はこのような歴史構造、思想構造になっています。台湾の知識人はこのように中国大陸、日本の植民地問題、現在の動きを考えている。ということが、二〇一二年の尖閣問題から見えてきます。

——最も危機的な状況から、最も想像力たくましくできるチャンスが生まれたということですね。

池上 二〇一二年の石原慎太郎の言動から、日本の戦前の歴史も含むアジアの歴史が分かります。ただ、尖閣問題はもつと前からありましたが、極端なかたちで出てくるのが二〇一〇年です。民主党政権だった二〇一〇年に、海上保安庁が（巡視船と中国漁船との衝突の）ビデオを公開するかどうか、あの問題のときはすごく盛り上がりました。

民主党政権に関する アメリカのレポート

池上 二〇〇九年に民主党政権になりましたが、その年の暮れか二〇一〇年の初頭に、日本のアメリカ大使館が本部に宛てた公電があります。アメリカはこの状況をどう捉えたらいいのかまったく分からない、というレポートです。どうも鳩山は危うい。アジア、アジアと言ってこれば危うい。鳩山はすぐ替えたほうがいいんじゃないかと。この公電の翻訳は、二〇一一年に原発事故があった直後ぐらいの朝日新聞に載っていました。あのときは日本中が原発事故で騒然としていたので、注目している人はほとんどいませんでした。

——それは一般公開されているものですか。

池上 朝日新聞に翻訳が載っていましたから極秘扱いではないでしょう。で、民主党のなかに二人の候補がいる。一人は菅直人で、もう一人は長島昭久。この二

人がいいのではないかと書かれていて、そのあと、菅になります。その公電がどういう役割を果たしたのかは僕には分かりませんが、なぜこの二人かというと、二人とも反中国と書いてある。鳩山はどうも親中国でいけないと。アメリカがそれを見て何をしたかは、僕には全然分からない。

——少なくとも、そういうものがあるわけですね。

池上 あるんですね。二〇一〇年の尖閣問題のビデオ公開の裏には、アメリカがいるのは当然で何か操作しています。

——そこまでは想像が及びませんでした。池上 二〇一二年も同様に、石原は日本、あるいはアメリカの国会ではなく、ネオコンのシンクタンクで演説したわけですから当然何かがあります。

——そのときオバマが登場したことが、さらにひねりを加えることになるのでしょうか。

池上 アメリカの対日、東アジア政策についてはまたあとで触れます。

マレーシア、マラヤ共産党

池上 分断体制と、たとえば領土問題から見てくる東アジアなど、日本の絡んだ歴史はいくらでもあります。つい数日前までマレーシアでシンポジウムに参加してきました。マレーシアの五〇年代を再考するというテーマでした。簡単に説明します。マレーシアにマラヤ共産党というのがあります。抗日のマラヤ共産党は、四八年にイギリスの統治にも反対します。マレーシアはずっと反共国家です。当時、非常事態宣言が出されて、イギリス軍による徹底的な壊滅作戦がおこなわれます。マラヤ共産党はジャングルに逃げ、農村をベースにします。中国方式です。悲しいかな、マレーシアは中国ほど広くないため、イギリスは最初こそ手を焼きますが、彼らがベースにしている村から人々をすべて移住させるという作戦を取ります。ゲリラが拠点にしている村を全部つぶしたのです。そういう作戦によって、マラヤ共産党はどんどん追

いやられます。これは共産党の歴史として、ずっと抑圧されたまま語ることを禁じられてきました。そこにシンガポールの問題が絡んできます。シンガポールがマラヤと一体かどうか、いろいろな議論はありますが、まあひと続きです。シンガポールでも、五〇年代と六三年にやはり同様の出来事があります。六三年の事件については『オペレーション・コールドストア』という本があります。シンガポールとマレーシアは反共国家ですから、これまでずっとこのような話はありませんでした。ここ二、三年で最新の議論です。

思想史の掘り起こし

——そういう話ができるようになった環境というのは、民主化が進んだと捉えればいいのでしょうか。

池上 コールドストアで左派が一斉に検査されたことは、「オペレーション・コールドストア」と呼ばれ、マレーシアの場合は非常事態宣言を意味します。そ

こにシンガポールの独立や暴動などさまざまな問題が関わってきます。二〇〇三年か二〇〇四年ごろから、特にマレーシアでは民主化問題がありました。マレーシアは四七年に独立して以来、UMNOという政党が七〇年近くずっと政権を持っていますが、それに対する課題がいくつもあります。民主化や、多民族国家ですからノンレイシャルな関係でやってほしいというようなことです。選挙のときは、腐敗選挙反対という運動が盛り上がりますが、こういう運動には必ず歴史の見直しが伴います。これがアジアのセオリーで、必ず歴史的根拠を求めます。——消されたものにスポットライトを当てるといふことです。

池上 それは趣味ではなく、運動に必要な部分です。運動のなかから出てきた思想の見直しです。思想史を掘っていくと、共産党の話になり、抗日の話になります。共産党は何をし、そもそもどういうきっかけでできたのかというと、それは抗日なのです。日本はマレーシアまで行って、三年間軍政を敷いています。要

するに、さきほどの台湾と同じです。マレーシアは植民地というよりは、単なる占領ですが、日本軍の問題と抗日の問題、マレーシアの七〇年間の歴史、今の民主化の問題、これら全部を同時に議論するわけです。目下の問題は民主化で、どうやって政権を取るかです。その際、歴史を根拠にするわけですが、ここ二、三年で次々に証言集のようなものが何冊も出てきています。

マレーシアで中華系は二十数パーセントのマイノリティです。今の政党はマレー人優遇政策をとっていて、インド人も優遇されて、その下に原住民がいるという構造です。ナショナル大学では、中国教育は一切ありません。だから中華系の人はみなシンガポールが台湾に行きます。シンガポールの場合人口比率が逆転します。そして、シンガポールは金持ちで、マレーシアは貧乏国です。そういった現在のさまざまな問題をなんとか解決していくために、思想史を、マレー半島全体の歴史を見直しています。だから、シンポジウムにはマレー人、中華

系、シンガポール人がいて、インドネシアからも来ていました。

僕らにはインドネシア、マレーシア、シンガポールに国境があるように見えますが、インドネシア語とマレーシア語は似たようなもので、みな一体化して論じています。アセアンはこのような感じでしたのだと思います。今、アセアンがともクロースアップされていて、経済的にも大きいし、発言力もどんどん増えています。アセアンのさまざまな構想が、東アジアに大きな影響を与えています。日本もそれを無視した経済政策は進められない状況です。アセアンの核はマレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピンで、もともと反共組織です。今は、ベトナムを抱えていますから違います。ただ、それぞれ敵対してはいませんが、とてもフレキシブルです。通じるものがあるのです。東アジアとは全然違う構造です。相互比較で見えてくるもののなかには、共通するものもあります。

第二次世界大戦、 敗北を抱きしめて

池上 台湾では、二・二八事件から白色テロの時代に民主化の芽がありました。すべてつぶされるのです。日本の場合もそうです。日本の一九五〇年代というどんなイメージでしょうか。

——六〇年代に入ると、ちょっと明るさがでてきますが、五〇年代というときまだ戦争が終わった直後で混乱しているというイメージですね。

池上 なんとなく混乱があつて、五五年で戦後は終わったということで、高度経済成長がきて、途中で安保運動もあったけれど、まあ、なんとなく来ていると、そういう感じではないでしょうか。ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』は、日本はアメリカと戦い、戦後はアメリカに占領されて、つらい思いをしたかもしれないけれど、結局はアメリカを、敗北を抱きしめた、みたいなストーリーですが、僕はそれをうそだと思うんです。一

〇〇パーセントうそだとは言いませんが、半分はうそだと思っています。日本の抵抗というようなものがいくつか、アジアとの交流で見えてきます。たとえば、マレーシアに行くと、知識人はあの戦争を第二次世界大戦と呼びます。太平洋戦争とは言いません。彼らはイギリスと一緒に日本と戦ったと言うのです。

——イギリスとですか。

池上 とても意外でしょう。なぜ、自分たちを植民地統治していた主人と一緒に戦うことが誇りなのか。これがアジアの常識です。マレーシア人が日本軍と戦ったというのは分かりますが、われわれはイギリスとともに戦ったと言うんです。これが日本にいると全然分からない世界です。日本は世界じゅうと戦争していますが、アメリカに宣戦布告した国を、日本以外に思い付きますか。アジアの人にとって、あれは抗日戦線であるとともに、反ファシズム人民戦争なのです。目の前の敵、日本軍と戦うために、連合国、反枢軸国、反ファシズム戦線のなかで彼らは戦っているわけです。イギリスはド

イツと戦っていて、われわれはイギリスとともに日本と戦っている。あわせて第二次世界大戦、反ファシズム人民戦争というのが、アジアでは普通の話ですが、日本人にはまったく分からない。

——イギリスという国が出てくるのが意外ですね。

池上 たとえば、シテイーミュージアムなどに行くと、広島、長崎で、日本は負けたと書いてあります。え、みたいな感じです。

——そこにはもう少し説明が必要だということですね。

池上 それはこれからだと思えます。僕ら日本人はアメリカと戦ったと思っていますが、世界的には全然違うのです。

——逆に言うと、いかに日本にとってアメリカが大きいかなですね。

池上 中国の天津で教えていて、中国との戦いに負けたと思っている日本人はあまりいないと言うと、中国人の学生はみな仰天します。向こうは、中国共産党がいかに日本と戦ったか、そういう歴史ですから。別にそれは共産党の宣伝でも何

でもなく普通の話です。

——でも、それは今の日本人が知るべきことですな。

池上 一九四五年から、シンガポール、マレーシア、台湾でも、韓国でも——朝鮮戦争が始まってしましますからちよつとかたちは違いますけれど——中国でも、ポストコロナアルの時期に、ものすごい民主化の動きがあります。民主化って平和です。独立、民主化、平和、この三つをどこの国もやるわけです。中国では革命というかたちで実現し、他の国では全部弾圧されたのです。ですが、韓国と台湾は八〇年代に、マレーシアとシンガポールとインドネシアでもついに今、そういう機運が出てきました。スカルノや九・三〇事件を見直そうという感じがあります。

民主化、独立、平和、文化運動

池上 日本でも、四五年から五〇年代までは、民主、独立、平和だったと思います。それがものすごかったのです。なか

なかなか言い方が難しく、共産党を過大評価してもいけないし、過小評価してもいけないが、共産党を恐れてレッドパージが起こりました。下山事件、三鷹事件、松川事件、たくさんあります。そうすると、共産党だけに話題が行って、すぐに共産党の指導の善し悪しの話になってしましますが、共産党は単なる象徴であって、その裏に民衆のどれだけの希望と運動があったかに目を向ける必要があります。終戦直後から自主的な文化サークルが日本全国で一万ほど立ち上がります。詩や絵画や演劇や歌声のサークル、映画鑑賞、読書会、さまざまですが、そういう自主的な文化運動が山のようにありました。

——政治的な強弱はいろいろあったかもしれないけれど、緩く、全体的にそういう動きがあったんですね。

池上 共産色の強いところもあります。が、全然関係なく、まったくブルジョアみたいなところもあるし、趣味の団体もありました。やっているものも別に左翼的というわけではなく、『無法松の一

生』や『青い山脈』などです。ヌードばかり描いているところもありました。一九五〇年から朝鮮戦争が始まると、戦間的な地域で、朝鮮戦争反対という詩をたくさん書くようなサークルが何百も、それも東京だけではなく、北海道から沖縄まであったのです。沖縄はアメリカによる占領という特殊な環境にありましたから、テーマは民族独立です。東京南部の、要するに京浜工業地帯ではとても盛んで、なかには反戦運動に絞ったところもありました。

今はもうありませんが、当時、大崎駅前には国鉄の被服工場がありました。制服を縫う女工が二〇〇人いて、その詩のサークルが『たんぽぽ』という詩集を出していたのです。女工が書いた詩をみなで回覧し合っていました。そこに「私の手」というような詩があります。私は中学校を出て、今ここで働いていて、中学生のときには真っ白だった手が、五年間働いて真っ黒になっちゃった。でも、私の手はいとおしい、という、どうということのない詩です。労働を詠った

詩もあります。その被服工場の隣は旋盤工場で、そこにも詩のグループがたくさんある。男ばかりで、すべてガリ版で詩の雑誌を出していて、隣の工場の女性の詩を読んで、お前の手を見てみたい、俺の手はもつと大きいぞ、という詩を詠むんですね。万葉集みたいでしょう。

——一つ一つがそれぞれ活動をして、つながりもあったわけですね。

池上 そうです。今のフェイスブックのシェアみたいなものです。一九五〇年、京浜工業地帯ではレッドパージによって共産党シンパとされたある工員がクビになります。彼は煙突のてっぺんに登って——今はもうありませんが、工場地帯なので当時はたくさん煙突がありました——おれは辞めないと抗議します。煙突の下では、組合と資本側が対峙し、煙突に登った労働者は詩を書いて下に降ろすんです。組合員がその詩を作曲家の家に持って行って曲を付けてもらったものが「民族独立行動隊の歌」という有名な歌になります。この歌を七〇年代ごろまでは共産党員全員が歌っていました。京浜

工業地帯のサークルの詩集タイトルは『東京南部民族解放戦線』です。アルジェリアの話ではないんですよ。

——日本でも六〇年代が熱かったということは雰囲気として分かるんですけど、その前に、すでに沸々と五〇年代からあったということですね。

池上 六〇年代は新左翼になっていますから、もう全然違います。そんな話はまったく知らないでしょう。

——六〇年代からしか……。

池上 五〇年代はなんとなく混乱していて、共産党が何かしていたみたいだけれど、どうってことなかったみたいな話ではないでしょうか。完璧に抑圧されているのです。

——コントロールが利いていたわけですね。

池上 マレーシアでも完璧に抑圧が利いていて、ここ二、三年でようやく本がたくさん出てきたわけです。台湾でもそうです。白色テロの人がたくさん殺されたとか誰も知らない。

——ではこれからそういう掘り起こしが

アジア、アセアンでおこなわれるのですね。

池上 日本でもそうです。共産党の善悪の話になり、共産党では駄目だということとで新左翼が出てきます。共産党はこの歴史を語らず、新左翼は共産党嫌いで、こういう運動をばかにしています。一般の人は知りませんし、すぐ忘れまます。結局、誰も知らないのです。ただ、四五年から五五年の間にはこういうことがあったのです。谷川雁のサークル村はとても有名です。三井三池炭鉱のあった筑豊の有名な詩人で、彼は、五七、八年ごろから、五〇年代前半のサークル運動を復活させるのです。復活させようとして有名になりました。

四五年から五五年の間というのは、ジョン・ダワーが描いたようなものではなく、必ずしもない。一〇〇パーセント間違いないわけではないけれども、半分ぐらいしか合っていない。平和、独立、民主のものです。すごい抵抗運動があったのです。これは他のアジアと変わりません。

——こうしたサークルは娯楽の一環でも

あったのでしょうか。政治的な部分もあり、娯楽の部分もありという感じで。

池上 文化ですから政治と遊びの区別は曖昧でフレキシブルです。何かあれば政治に傾き、何もなければ趣味に傾きます。政治を目標とするグループではありませんが、文化は揺れ動きます。曖昧なところがあり、それが文化の面白いところです。

アジア戦後史

——五〇年代の歴史が、今の目先の政治的な課題と直接的に関わりながら、どんな立ち上がりがあるという話は、新たな中国像の構築ということにも連想が及ぶのですが、今の中国がこれから変化を遂げていくなかで、既存のシステムは、どちらかというと変化というか解体されていくような感じを私は受けるのですが、そのなかで新しい中国像を構築していく動きを感じ取られたりすることはありますか。

池上 先ほどの話をもう少しさせてくだ

さい。マレーシア、日本、台湾の、同じ五〇年代に起こったことを、共通の認識として連動させて語らなければなりません。

——相互に。

池上 相互に五〇年代史を比較し共有することが可能なのです。長い間抑圧されてきて、最近発掘が始まっています。アジアで一つの、一〇〇パーセントの共通認識かどうかは別として、かなり幅の広い、アジアの歴史、戦後史です。戦後史というのは、植民地も含めてです。植民地期の課題の克服を含んだ、共通の課題になるわけです。アジアと交流するなかで、日本を説明するためには、五〇年代からすべきではないかということです。

——「歴史認識」という言葉が出てくると、どうも硬直した感じがしますが、そうではなく、五〇年代からというところで、新しい基盤が、創造のための基盤が出てくるのですね。

池上 そうです。いきなり植民地期を共有するわけではありません。南京虐殺は何万人なのかではなく、五〇年代から

逆に考えていくのです。今の問題から五〇年代、そしてさらに植民地期へと。植民地期と戦後の六〇年、七〇年と、今の課題という、この三つを混ぜ合わせて、それで、お互いに共通するものを考えていく戦略です。

断絶した歴史

池上 お尋ねの中国の話について、一つの大きな問題はやはり改革開放です。四九年から文革までは毛沢東一人の思想を考えれば大丈夫です。八〇年代からの改革開放は、革命をやめて、共產主義もかたちだけにして、資本主義です。八〇年代はさまざまな資本主義のモデルを模索し構築しながら、九〇年代からは新自由主義です。世界中、同じことです。中国は、現実としてそうなっているといううだけの話です。

歴史認識について、知識人の問題として捉えた場合には、中国には二つの歴史があることになります。革命の歴史と資本主義の歴史です。これをどう接続して

いいかが分からない。中国現代史として一貫した説明が可能かどうか分からないのです。革命の継続として資本主義があるのか、革命と断絶して資本主義があるのか、それとも、今の資本主義は、かたちは資本主義だけでも別物なのか。八〇年代、毛沢東をどう考えるのか、そもそも革命、文革とは何だったのか。全部バラバラなのです。これは現在進行中の大問題で、知識人はこの問題をめぐって活発に議論しています。毛沢東が一番悪いんだと、革命を全否定する知識人はたくさんいます。

——それは、中国国内のことですね。

池上 革命はそもそも間違っていて、あんなことをするから中国がむちゃくちゃになったと。

——簡単すぎる言い方かもしれないですねが、やはり人口が多いから。

池上 中国の最大の課題は一三億人を使うやって食べさせるかです。食べさせずに失敗したら易姓革命です。それは絶対してはいけないこと、至上命令です。すべてがそこから発想されて動いているわ

けです。それは現実問題として、知識人の最大の課題は断絶した歴史をどう一貫して説明するかです。そのなかで失うことはたくさんあります。たとえば、僕たちが五四運動や毛沢東に感激するのは、彼らがこれが人類の普遍的正義だと示したからです。

——その普遍性自体に胡散臭さがあります。

池上 それは今の問題であって。七〇年代ごろまではみな感激したわけです。反帝国主義のもと、アメリカなど張り子のトラで、人民にこそ義があると。僕のイメージでは、中国でも、義があるとか理があるとか、そういう言い方がびつたり来るのです。人民に義がある。われわれはそれを堅持している。全員ではないけれども、ある人は頑張っている、と拍手を送りました。八〇年代以降は誰も拍手などしません。昔は、職場のみなでいるんなことを議論したのに今はバラバラです。

——新自由主義が普及していることに対する反動なのか、北京で中国人の方と話

をしたときに、古き良き中国に戻りたいというようなことをおっしゃってました。たいへん成功された方なのですが、やはりお金じゃないというようなことをおっしゃっていました。

池上 それは普通の庶民感覚だと思います。昔は楽しかったけど、今は成功したのにあまり楽しくない、というのは単なる懐旧の情です。知識人はもう少し自覚を持っていて、それを歴史の断絶と表現します。中国の知識人は庶民感覚とあまりかけ離れていません。そういう庶民感覚で、彼らは歴史の断絶をどう克服したらいいかを大激論するのです。たとえば、五〇年代の大躍進のときに何人死んだのかということは、いまだに決着がついていません。反対する人は一〇〇〇万人が死んだと、支持する人はいや一〇万人しか死んでいないと言います。一〇万人が死んだのいいことかという問題は別です。大躍進で何人が犠牲になったかは、中国としてはまったく決着がついていません。まったく未知のものです。

——なかなか決着がつきそうな気はしま

せんね。

池上 決着がつくかどうかは別として、そういう議論を通して、歴史を一貫して説明するにはどうしたらいいかをみなで考えています。もう一つ、さきほど言ったように、七〇年代までは、革命に義があると、世界のかんりの人は拍手をしたのです。今は誰も拍手しない。中国もやはりそのことを思っています。われわれは普遍的なことを主張できない。これは言論抑圧とは関係ありません。そういう雰囲気ではないのです。改革開放のこの路線が人類普遍の道なのだと、誰も胸を張って言えないわけです。昔は、少し前は、胸を張って中国は義があると言えたけれども、最近では、中国人は金の亡者になってしまったと。それは良いか悪いか、当たっているかどうかは別として、今の中国知識人の悩みです。

中国はまず自分自身を外に対して説明しません。中国の一貫した歴史はこうで、朝鮮戦争をこのように戦って、文革はこうで、今はこうですと、こういう問題をやっている人はほとんどいません。

知る限りでは、孫歌や汪暉ぐらいです。彼らは一貫した説明を何とかしようとしています。

若手研究者の可能性

——その説明をするときに、何かしらの参照枠が必要になってくるわけですね。

池上 孫歌の場合は、竹内好や丸山眞男を使います。汪暉の場合は、西洋理論で、ウェーバー、アラン・バディウ、ジジェクなどです。説明様式は人さまざまで、それが面白いわけです。今の中国の普遍性とは何かを考えている人は何人かいて、それがまさに中国の課題です。

このあいだ、北京であった若手の研究会を聴きましたが、彼らは危機を感じていて、彼らの課題も、今の中国を歴史的に一貫して説明するためにはどうしたらいいのかということでした。もう一度、革命史を四九年から全部見直すために、今年は四九年から五一年、来年は五二年から三年までやるという具合です。そういう研究会ではいろいろな発見があ

りますが、外に向けての説明がないんですよ。

——自分たちの。

池上 自分たちのなかだけでの説明。若手だから、そこが汪暉や孫歌と違うところ、あともう一步というところがありますけれど、ただ、危機感を感じていて、内容自体も則して考えれば面白い。

僕が聞いたのは、五〇年の新民主主義団体についての議論でしたが、そこにはソビエトの話は一切出てこない。五〇年代初期の段階でソビエトの影響がひと言もでない中国史などありえないです。ただ、彼らはそうやってしまふ。新民主主義は、毛沢東が一九三七年に書いた論文ですから、当然、人民戦争があります。人民戦線ですから幅広い反ファシズム連合なのですが、彼らはそういう話には一切触れない。中国は頑張ったという感じです。まったくその通りなんです。ただ、今の段階で振り返るときに、マレーシアがやっているように、世界の反人民戦争、反ファシズム戦争を考えない限り、世界と接続することはできません。

彼らは中国のたいへん優秀な若手研究者ですが、やつと著書を一、二冊出したところで、まだこれからです。ただ、孫歌や汪暉の他に何人も上の世代で頑張っている人がいますから、彼ら若手の著書を読むのが楽しみです。

——五〇年代の歴史を共通基盤にしているという話は可能性を感じますね。

池上 だから、自慢することはないと思いますけど、日本も、あの時代に可能性はたくさんあつて、アジア共通の課題として戦っていたんだということは、もっと自覚して、それをベースにしてアジアと話せばいいと思います。

——分断されてバラバラだった国境線が、少なくとも話し合うための共通の基盤を持つというのは、とても新鮮な話ですね。

池上 植民地期の南京虐殺について話し合うのは当然ですが、それだけではきついです。

——進まない感じがします。

池上 前に進まない。六〇年代、七〇年代、脱植民地化、民族独立、民主化な

ど、国によって言い方は異なりますが、つまり、歴史と今の課題と植民地期、この三つが組み合わさりながら、問題がごっちゃになっているからです。これは植民地の問題、これは一九八〇年代の問題、これは今の問題、そのように個別には出てきません。歴史的説明というのは、今言った庶民感覚をもって考え、ゴチャゴチャになっているところを何とか共有していかないと駄目なのです。

——暫定的かもしれないけれど、何とかして一つにイメージ化をするということですね。

ひまわり運動

池上 もう一つ例を挙げると、台湾でひまわり運動がありましたね。中国と台湾は一国二制度だと中国が一方的に言っており、貿易協定に関して言えば、中国から見れば、台湾もそうですが、中国と台湾の間は国際協定ではなく国内協定です。貿易協定のときに、中国資本がどつと台湾資本に流れたことで、台湾が非常

に危機感を持ち、中国資本に支配されるという言説が広まって、猛反対が起きました。それが台湾の国会占拠にまで発展しました。今の馬英九政権に対抗して、国会占拠ですから大事件です。台湾は直接行動で、特に学生、若者が頑張っていました。日本では、安倍政権の現状や、原発問題や、集団的自衛権の問題もあるような状態のなかで、民主化が未熟です。だから、台湾の学生が国会を占拠して自分たちの主張を通していて、これは素晴らしい民主化闘争であると、活動家は感激するわけです。日本に足りないものですから。そこまではいいです。台湾のこの運動を参考にして日本も頑張つてほしいです。

ただ、問題はそこにとどまりません。

これは裏に台湾と中国の分裂の問題、台湾の独立か統一かという問題があります。日本では台湾の今の立法院占拠に絶対に言及しない。これは難しい問題ですから言及すればいいというものでもありませんが、そこまで見ないと、アジアも台湾も中国も分かりません。またその背

景には何があるかと言うと、当然、経済協定、つまりTPPやFTAの問題があります。この問題だけで言えば、台湾の学生は中国との自由貿易には反対するけれど、TPP、つまり、アメリカとの自由貿易には反対しないのです。

TPPとRCEP

池上 アメリカの一つの課題は、アメリカも財政難になっていますから、今、世界で一番豊かなアセアンも含めた東アジアにどうやってくい込むかということです。そのためにアメリカはTPPを主張する。ところが、アセアンが主張しているRCEPがあります。同じ経済協定ですが、アメリカが入っていないのです。

これは程度問題で、どちらも自由貿易協定です。TPPは相手の法律まで手を加えます。RCEPは法律までは変えない。金子勝はRCEPの方がいいと言っています。日本の通産省はどちらもおこなっています。要するに主導権の問題です。アメリカが主導権を握る自由貿易

か、アメリカを排除した経済協定か、これが台湾のひまわり問題の背景にあります。アメリカの国務長官は今、ジョン・ケリーですが、その前はヒラリー・クリントンです。クリントンからケリーに代わる時、若干政策を転換したのだと思います。アジア海域の問題をめぐって、クリントンのときはかなり敵対的な中国包囲網という感じだったのが、ケリーは中国と少し親和的な路線だというのは有名な話です。アメリカは中国を包囲しているのか、それとも二大巨頭でやりたいのか、ウォッチャーの間では常に議論があります。とにかくアメリカは、日本を利用して東アジアの経済にくい込もうという、明治維新以来一貫した戦略です。ただ、徐々に日本は役に立たなくなってきました。

——そうですね。私もマレーシアやフィリピンなどの大学に訪問し、また、シンポジウムなどで話を聴いていると、この切れ目が縁の切れ目みたいに国際社会から取り残されていく気がします。

池上 経済的条件と経済的戦略と軍事的戦力はまだ必ずしも一枚岩ではありません。沖縄の辺野古の基地建設の問題がある一方で、日中韓FTAをアメリカはとも嫌います。アメリカが一番嫌っているのはアメリカを排除した地域間の連合です。

——バラバラにしておきながら個別にコントロールしたいということですか。

池上 そうです。中国と経済的なところだけ仲良くすることがアメリカの思惑です。あとはバラバラにしておきたい、まとめるのが一番怖いというか嫌なので。ままとすると、アメリカが排除されるのではないかと。みな経済的に豊かになりたいし、アメリカを排除して経済的に豊かになどなれませんから、現実になんかとは思っていませんよ。ただアメリカが妄想的に思っているだけです。それだけの理由でアメリカが主導権を握ろうとするのが一番の問題です。

——どんな芽も摘んでおこうということですね。

池上 だと思います。日本もそれを知っ

ていて、わざとかどうか分かりませんが、全然考えていない。今の政権は特にそうです。まだ鳩山は少しだけ考えていたと思います。

BRICSについて言うと、ロシアにとってはウクライナ問題が大事になっていきますから、当然、ロシアは中国にどんなシフトします。アメリカとEUを追いやっているんですね。ロシア、中国、インド、この三つを合わせれば人口は世界の三分の一です。ブラジルを加えてBRICSになると半分近くいきます。この巨大な場所ではIMFに対抗した銀行を作る構想まであります。多分できると思います。今すぐは、ほとんど力はありませんが、将来は分かりません。アメリカがウクライナ問題でけちをつけて、新冷戦みたいな言い方もありますが、少し違うと思います。アメリカの役割は、冷戦のときと全然違ってきます。論理は一貫しているのかもしれませんが、動きとしては違っています。経済的な主導権を取り、軍事はそれに沿いながら、まったく別の動きをして、基地は着々と予定通り

作る。そういうことになっています。

反原発

池上 民衆の動きとしては、台湾ではひまわり運動などで、日本の場合は今一番盛り上がりつついるのは反原発や集団的自衛権などです。それらをどのように普遍的な課題と結び付けていくかが大切です。別に原発と集団的自衛権とを結び付けなくてもいいですけど。現在、原発の再稼働に七割が反対していますから、日本はこの問題を何とかしないと先がありません。

——中国もこれから原子力発電所の建設が予定されていますが、そういう議論は中国ではあるんですか。

池上 ないでしょう。中国に今、二〇基ほどありますが、将来一〇〇基にするというのは単なる標榜でしょう。日本には反原発に関するものが山のようにありますから、それを中国語に訳して、アンソロジーとしてホットキスで留めたようなものはいくつかあります。

——中国で出回っているのですか。

池上 どの程度出回っているかはよく知りませんが、知識人の間で、ちよつとこれはまずいのではないかということがあります。たとえば広東省で、核廃棄物処理場建設に地元住民が反対して、三日間ほどで計画をつぶしたことがあります。

——住民が勝利したわけですね。日本だと、なかなかそうはいかないですね。

池上 中国の場合は、三日で片が付くか付かないかが勝負です。日本のように二年間かかって、まだズルズルやっているということは中国ではありえません。三日で一人ぐらいが行動を起こせば、そこで決着がつきます。事務所に乗り込んで全部壊す。それでおしまいです。誰も逮捕されません。やはり人民は怖いのです。国の制度の在り方とか、その歴史や条件はさまざま違うので一概には言えませんが、たとえば、集団的自衛権反対で国会前に三〇〇人ぐらいが集まった、ということとは中国でもたいへん応援されています。日本人が頑張っていると、テレビが取り上げて応援します。それから、

反基地運動での日本と韓国の連帯は割とイメージしやすいと思います。ただ、中国には市民運動団体がないので、具体的に人民に訴えるしかありません。日本で二〇一一年三月一日に原発事故があったとき、直後に中国で塩が売り切れました。理由は放射能飛散に対する恐怖でした。そこで塩が効くといつて買い占められたのです。一時、店頭から塩がなくなりました。そのあとうそだと分かった塩の値段が暴落し、買い占めた人は大損しています。中国人は放射能が怖いんです。

——そこは共有できるのですね。

池上 このニュースを聞いたときはすぐくうれしかった。要するに連帯感です。放射能が飛んでくるのは日本人も怖い。中国人も怖い。同じ気分を共有できてうれしかった、という報告を、二〇一一年の六月に上海しました。

——名古屋でも中国に帰国する留学生がいました。

池上 中国人は容赦なく逃げます。正直なのです。現地で戦う人はあまりいませ

ん。危険を感じたらみな逃げます。どうしようもなくなるまで戦いません。負けの戦はしません。上海でこんな話をしたら怒られるかなと思ったら、結構受けました。

トラウマの共有

——今日のお話を聞いて一貫して分かることは、トラウマ的な状況や危機的状況から、分断されていた国、あるいはグループなどが、いかにつながっていくかというところの可能性ですね。

池上 議論の共有です。マレーシアで五〇年代の話をしたら、日本でも台湾でも、別のかたちで中国でもある、そんな話ができるのです。そこから今の問題を、植民地問題を考えるのです。

——さまざまな表面的課題はあるけれど、一番根深いというか、大きな問題は第二次世界大戦で、そこにつながって、トラウマ的な記憶を何かしら今の問題として新しくつながれるものにして変えていけるかが一番大切なのです

ね。

池上 その通りです。たとえば、竹内好の説明はアジアでとても通用します。『方法としてのアジア』の議論を、竹内好の通りに日本を説明すると、みな、なるほどという感じです。非常に使い勝手の良い議論なのです。

アジア現代思想

(Modern Asian Thought, MAT)

池上 七月に台湾の新竹でサマースクールをしました。韓国や中国はもちろん、バングラデシュ、インド、タイなど、縁のない所からも多くの学生が来て、そこで竹内好の話をしたので。竹内が言うアジアは、バングラデシュも入っているんです、おお、という反応が新鮮で面白かったです。課題を発見して、最初は違いから入って、似ている部分もあるという具合です。竹内好の「アジア主義」をめぐるのはさまざまな議論があります。が、彼が言うのは、日本はアジアを侵略した、だからこそ、日本はアジアに対し

て責任があるというのが根本です。東南アジア、東アジアは大体、インドの端辺りまで大東亜共栄圏でしたから、ほとんどの地区と関係しています。だから変な話ですが、有利というか、それだけ話し合える基盤がたくさんあります。日本人の特権です。

——特権と考えていこうということですね。

池上 西アジアや中央アジアは、また別の論理が必要かもしれません。南アジアも面白いです。

三年前から、陳光興、孫歌、そして、さきほど話した何人かの友人と、インターアジアスクールをおこなっています。そこで、MAT (Modern Asian Thought)、「アジア現代思想」を立ち上げて定期的に集まっています。今のところは、国別ではなく都市別にやっています。東京、ソウル、北京、上海、香港、シンガポール、新竹、那覇、といった都市で、年一、二回はワークショップをしてみたいもの集まる。形式的にはNGOみたいなものです。もう少し何かできないか、もう少し

いろいろな所に行けないかなど、共通の課題に取り組んでいくのは大変な作業です。そのなかで、分断体制が、五〇年代が、いくつかの課題が見えてきて共有できます。その一つとして、思想家を共有しています。竹内好は日本語ですが、英語、ドイツ語、中国語、朝鮮語の翻訳もありますから大体読めます。ただ、マレー語、タイ語、ヒンディー語はないのでこれからです。魯迅や、あるいは東南アジアにも偉大な思想家や小説家が多くいます。共通の古典、テキストみたいなものを作っていきたいのです。

——セレクションをされていくのですね。

池上 セレクションして、それをみなで討論して、共有するのです。タゴールの言ったことをみなで共有しよう。ヨーロッパではハイデガーやプラトンを共有しているではないですか。ドゥルーズでもデリダでもいいですが、そういうものを作っていく。タゴールでみなが討論できる。竹内好と言えば『方法としてのアジア』という具合です。

翻訳、相互理解、共有

——翻訳という、自分たちの文化の記憶の共有のための思想ですね。

池上 ただの共有ではなく、それを使って自分たちを説明して、お互いの課題を共有していく。相互理解と共有です。主な作業は翻訳になります。一方では哲学、政治思想、文学などから共通のテキストを作って共有します。もう一つは、今の課題、民主化であるとか、原発問題でもいいですが、そういうものから見えてくる歴史、植民地も含んだ、六〇年代、七〇年代、八〇年代の歴史を現実問題として共有していくことです。

——壮大な計画ですね。

池上 これは計画です。なるといいなという。

——でも夢を感じます。思想とか理論では、ポスト構造主義やポストモダンを経て、ポストセオリーの時代になって、次は何かというところで、いま伺った話には夢がありますね。

池上 東アジアでやっている分には、英語は必要ありません。ただ、東南アジアや南アジアでやる場合は英語が必須です。中国人は英語に対して非常に反発心があります。やはりアメリカ嫌いですから。

——ライバルなんですね。

池上 あまりに政治的なことをやるのはどうかとか、いろいろな問題があつて、カルチュラル・スタディーズはかなり西洋的理論ですから、それに対する反発もすごくある。これは使うべきだ、いや、あんなものは、といったでこぼこはいくらでもあります。

——中東やインドの理論は、ポストコロニアル理論で少しは翻訳されたというか接続した部分もあると思いますが、北東それから東アジアというのは、まだまだ接続していない気がします。

池上 ほとんど知らない世界ですが、南アジアと西アジアのマルクス主義者なんて、山のようにいるのに、ほとんど翻訳されていません。西洋も知らないです。

——では発掘のしがいがありますね。

池上 あると思います。ただ、タゴールはイギリスではものすごく有名で、山のように論文があります。ですが、インド共産主義者の思想は誰も知らないのです。日本も西洋も知りません。そういうものがたくさんあります。豊かな思想はあるわけです。大切なことは、教養として読むのではなく、それを基にして今の問題を共有して一緒に考えることです。そこまでいくといいなと思います。まあ、夢です。ただ、今のところは思想に偏っていますから、もう少し文学や美術などもやりたいです。

美術ではたとえば一つだけ言えるのは、版画です。アジアでも五〇年代、六〇年代に多数あり、どこにでも普遍的にあります。版画だけでも共有できるので。もともとは魯迅が版画運動をおこなって、それにさまざまなバリエーションがあつて、アジアだけにとどまらず、ソビエトの社会主義にもあります。ソビエトやドイツを含んだ世界版画史なんてどうでしょう。版画史の本はありますよ。ただ、そういうものに焦点を当てた

本はありませんから。

——グラフィティも、メディアとか、翻訳装置と考えられないでしょうか。池上 それはあまり考えたことがありませんが、ポピュラーカルチャーでいえば、一つの提案として、東アジアで普遍的に流行している韓流ドラマやKポップはどうでしょうか。中国でもKポップのまねみたいなのが街中にあふれています。

——韓国政府が必死になって、海外のテレビ局にお金を渡してまで宣伝したという話は聞きますね。

池上 でも、学生の反応を見ると、別に政府に踊らされているんじゃないくて、自分たちでこれがいいと思って、勝手にダウンロードして好きで聞いている感じがします。アニメもそうです。そこからまた思想の問題に行くのは、いくつかのクッションが要ると思います。

第三世界としての日本

池上 ヨーロッパについて言えば、さき

ほどから言っている民主、平和、独立はヨーロッパの概念ですが、みな使っています。公正な選挙とか、選挙はあつたりなかったりですが、結局、西洋を拒否しているわけではないと思います。それは主観的なものですから拒否したい人もいるかもしれませんが、逆に、西洋が実現できなかった理念をアジアで実現できる可能性があるというのが『方法としてのアジア』です。西洋概念を拒否して、アジア独自の概念があるというのではなくて、アジア独自の問題や歴史的條件があるということです。この地域で民主とは何か。それは別に西洋的価値への対抗ではないのです。

——たまたま、便利な道具というか、ソースとしてあったから、お互いのコミュニケーションの道具として使っているということでしょうか。

池上 もう一つ、日本は自覚していませんが、他のアジアから見ると、日本は第三世界（今はグローバルサウスと言っています）です。経済は発展しているけどアジアだろう、という感じがします。

——まあ、入れてもらえた方が、ある意味、ありがたいと思います。

池上 日本には封建的な要素がたくさんあり、慎ましいものを食べています。他のアジアに比べ、清潔で経済的にある程度成功した国ではありますが、基本的にはアジアです。

——自分自身がアジアの一員かどうかという認識が、私のなかで揺らぐところがあります。

池上 厳密にアジアの一員かどうかを詮索することはないと思います。ただ、アジアの人はそう思っているし、そこを介さないことには対応はできません。日本人自体は、第三世界かどうかで悩む必要は別にないと思いますけど、そういう認識を持たないと、対話は、相互理解はなかなか難しいです。

たとえば、バンドン会議は、第三世界の典型的なイベントですが、日本は正式メンバーと呼ばれています。だから、アジアは、バンドンは、日本を第三世界だと思っているわけです。ただ、出席したのは自民党で、特に左派はそう

思っていないと思いますが、アジアの認識としては当然でしょうね。

——今欠けているものは、アジアの共通基盤、土台で、それがいつ達成されるかわかりませんが、達成された延長線上には、世界全体が最終的に現れるわけですね。

国民国家

池上 当然そうです。アジアというよりは世界です。

——答えはない方がいいとか、愚問とも思いますが、直近、この先々、中国なりアジアがどのように変化していくのか、断片的でもいいので何かイメージみたいなものを、抱かれているところがあれば、教えていただけると有難いのです。

池上 それは難しいですね。日本の出方にかかっているのではないのでしょうか。別に日本だけがファクターではありませんが、日本、中国、韓国、東アジアだけで言えば、国家の枠組みは非常に強い

です。だから、どうなるかわからないけれども、そうではない思考を、国家を代表していないわれわれができるのではないのか。領土問題にしても、そのところをどう動いていくかが今後の焦点でしょう。

たとえば、アジアの話ではありませんが、ウクライナ、ロシアの問題があります。ドネツク人民共和国の独立宣言は社会主義の遺産だと思います。ソビエトの分離結合の自由のつとめた社会主義の経験がないと、あんな主張は出てきません。今は内戦みたいになって、かなり厳しい状態にありますから楽観的な見通しは立てられません。彼らが示した理念は、ドネツクが独立して、ルガンスクが独立して、そのうえで自由にもう一回組み直すというもので、なぜ、彼らが独立を主張したかという、それはキエフに理がないからです。自国の国民に対して軍隊を差し向けるような政府に、正当性はないというのが簡単な理由です。彼らがロシアに編入されるかどうかは、全然別の話です。まず独立したうえで、キエ

フ、ロシアとの関係をもう一回考える。

これは可能性です。今ある国民国家とは違うかたちを垣間見ることができるようです。現実にはなっていないから。

——宙づりにされた、国ではない固まりができあがりつつあるということですか。

池上 そうです。たとえばロシアの知識人、左派の知識人の論評を見てみると、これはウクライナにとっても、ロシアにとつてもとてもいいことだという意見が多いです。つまり、彼らが独立心を誇示すること、ロシアで忘れられてしまった社会主義の理念を思い浮かべられるというものです。ウクライナとロシアの問題は、もともと一つの国ですから連動しています。だから、彼らはそこに新しいかたちの、一つの希望を見えています。これはウクライナの話でアジアの話ではありませんが、そういうことがアジアでも見えてくるかもしれません。

——中国で国家を考えると、民族とどう折り合いをつけるかというところ、今のウクライナの話とはつながるの

でしようか。

池上 中国で各民族が独立して……、という話は考えられません。ただ、中国でも知識人は困っています。広すぎて、辺境をどう考えるかという話です。ウイグル人やチベットが独立するなどという話は全然ありませんが、とても中国とは思えない所を、中国はどうやって認識し直していくのかということは非常に興味深いです。

不安からの新たな思想原理

池上 韓国ではセウォル号の事件で盛り上がっていて、確かに二〇〇人が死んだら大変なことだと思います。どうしてここまで問題になるのか、若干疑問はありますが、理由はやはり、今の政権は何かあったときにわれわれを見捨てられるかもしれない、という不安感があるからではないでしょうか。昨日、おともいも、五万人ほどがソウルなどでデモに出ています。そういう情勢や、日本での原発の行方は、これから一つ一つ見ていきたい。

反原発運動は、デモという表面上の現象ですが、要するに不安感です。不安感があるのくごく蔓延して、民主党がその処理に失敗した。そこにアメリカが入って、こうした要因で今の安倍政権が成り立っています。安倍政権はまったくの反動政権です。不安感のうえに成り立っているの、安倍政権が何とかしたいのなら、やはり、三・一一の処理が大きな問題です。

——不安の軽減ということですね。

池上 不安をどう乗り越えるのかです。どう処理するのかという問題と切り離せません。日本ではそういう問題ですが、韓国でも中国でもロシアでも、別の問題はいくらかもあります。それらはバラバラですが、一つ一つの原理につながる新しい要素がいくつものどこにでもあるということ。日本だったら、たとえば、原子力体制からどのように脱却して、別の構想をどうやって立てるのか。各地でさまざまな議論が集まることで、次の新しい原理につながるように、みなで促していくのです。何かは分かりませ

んが、新しい世界連邦の構想とか、そこまでは行かなくても、何か新しい政治原理、思想原理を見いだせるかどうかにかかっています。

中国の行方

池上 具体的に中国はどこに行くのか、それだけで言えば、中国はどんな新自由主義の方向に行くのではないでしょう。

——でも、それとのせめぎ合いで、また何か新しいものが出てくるのではないかということですね。

池上 そうです。民衆はかなり疑問視しているところもあります。たとえば、一つは腐敗です。習近平は、本気でやっているという説と、かたちだけという説があります。汚職を取り締まっています。これはみなよくやっているという評価はあります。それぞれの課題のなかから、次の新しいかたちを、自分のことは見えにくいですが、外からの見方と組み合わせながら見ていくのです。相互参照しなが

ら見ていくと、いくつか芽はある気がします。

——軍事の話で言えば、最近、パールハーバーでのアメリカ軍の軍事演習に各国が来ていますが、中国も確か参加していますね。こういうのは今後の中国の行方に、大きく何か作用すると思われるのですか。

池上 プラスに見ようと思えばできます。軍事演習には二つあって、一つは相互の調整で、もう一つはお互いの手のうちの探り合いです。軍事的秘密があれば、これを機会に探るというものです。プラスに考えて、信頼醸成と捉えれば、動きが変わっていく要素の一つである可能性はあります。すぐこれがどうなるかは分かりませんけど。

——今年から共同でやっているというのが新鮮です。

池上 それはテロや海賊という具体的な理由もあります。

西洋理論の彼方

池上 ところで、マレーシア人に呼ばれて観たドキュメントがあるので。さきほど言った、ジャングルで戦ったマラヤ共産党員の生き残りへのインタビューです。延々とジャングルでの戦闘のことを語るんです。もう八〇歳前後で、一九四〇年に抗日に参加して、戦後、共産党に入り、ジャングルに入りましたが、とても爽やかなのです。その屈託のなさにはなかなか西洋理論では捉えられません。そういうのを考えてみると、何か新しいものが出てくるのではないのでしょうか。

そういうものはあまり読んだことがないでしょう。ポストコロナアルにも、テキスト理論にも、映画理論にもあまりないと思います。

——今回、ご著書を読ませていただいて、たいへん記憶に残っていることがあります。あるドキュメンタリー作品があつて、その監督も実は、今、対象にし

ているものに対して、必ずしも完全にコミットできていなくて、むしろどちらかというと、映画を観ている側の人間として、他者なるドキュメントの対象を眺めて、彼らに対して、映画の観客とともに想像力を働かせている、といったことを書いておられますね。

池上 アジア的心情なんですけれど、心情で片付けないで、映画理論として捉えることができると思います。ドキュメンタリーでも、ゲリラの在り方でも、歴史の在り方でもいいですが、要するに、そこから理論を組み立てていくのです。これが誰もやったことがないアジアの面白さです。

——そうですね。すごく魅力的です。最初の出発地点から、ほんとと違う世界に私もいざなわれていくのを感じます。

池上 僕は知識人じゃないし、僕らにとって国家批判は常識です。でも中国には国家批判がないんです。中国国民と中国国家を分離するって言っても、ピンと来ない人がすごく多いのです。西洋理論を学んだ人はピンと来ますけど、そうで

はない人は、え？中国国民と中国国家って違うんですか、という感じで、一つ一つが新鮮なのです。ある人から見ると、それは君たちが国家に食われているとなりますけれど、そういう思考を外してみると新鮮なんです。国家って何だろうと中国風に考えてみて、中国から抽出してくるのは可能だと思うんです。それは共産党に洗脳されているとか、中華なんとか思想だとか、知ったふうな言葉で言わないで、謙虚に見てみるといろいろ発見はあると思います。そういう思いがけない動きをみなするんです。

——ぜひ、そのことを忘れずに、研究に何かしら展開していきたいと思います。

アジアの身体の彼方

池上 たとえば、アメリカのヒップホップを見ていても、これは黒人特有のなんとかって発想はしてはいけないことになっていくでしょう。

——そこは、アフリカ系のものでもあり、アフリカ系のものでもないという、

両方で微妙なところでした。Black is Beautiful という時代もあったので、それを全否定することもなかなか難しい気がします。

池上 だから、そういう目でアジアを見ればいいと思うんです。アジアは、アジア的情緒とかBlack is Beautifulの段階にとどまっていて、情緒の一步先へ進むとロジックが見えてくるというか、そういうことを考えなければならぬ段階に来ているんです。アジアの身体と、七〇年代初めに日本でよく言われましたが、分かったような、分からないような話です。——まったくないことはないかもしれないってところですね。

池上 別にそれは悪い話ではないです。

Black is Beautiful って一回は言ってもいいんですけど、その先へ行くと、黒人の歴史とか、白人との絡み合いとか、さまざまなものが見えてくる。アジアでも同じく、アジアの身体といった段階の先に行くと、歴史や、地域との絡み合い、社会のストラグルといったものが見えてくるのではないでしょう。

国民文学、自己認識

——最近、人種は存在しないという人がたくさんいるので、それをどうするかという話にもつながります。

池上 日本だけの議論では、民族とか国民というと、排外主義であるときよく問題になります。たとえば、今運動があった、そこで民族とか国民とか言う問題がありますけれど、歴史的要因ですからね。

——何かしら穴が空いた構築物、あるいは、変化するソースとして捉えればよいのでしょうか。

池上 そのように捉えてもいいですけど、たとえば、民族で何を表現したかったのか。多くの地域に民族文学があります。韓国には民族文学という確固たるジャンルがあります。日本では民族文学と言わず、国民文学と言います。同じことです。国民文学が何だったのかという話をしないと、韓国の民族文学は絶対に分からない。韓国の民族文学が分からない

いと、韓国は絶対理解できません。韓国の若者が拒否反応を示すことは多いですが、それを理解しないと、民主化の歴史は分かりません。同じように、日本の国民文学も、そのように理解しないとつながりません。日本にはそんなものはありませんで話になりません。

国民文学には、明治以来の長い伝統があります。国民とか国家という名称ですぐに拒否反応を起こさないことです。新しくもないですが、今までと違う歴史の見方です。

相互理解と同時に自己認識も大事です。日本史をもう一度、一国史ではない見方で見てみる。

——アジアというコンテキストのなかでのアイデンティティ・ポリティクスといった感じででしょうか。

池上 いや、アイデンティティではなく説明です。説明して、相互理解するということです。僕は日本人ですとか、そういう話ではありません。アイデンティティは、自分が今考えていることの由来です。自分が何者であるかではなく、自

分は何をしているのかの説明が重要です。

——無意識の部分を探す。

池上 説明できないもの、見えなかったものを説明するわけですから、それは無意識かもしれません。

——それは他者から指摘される部分ですね。

池上 指摘されることもありますし、されないこともあります。だから、向こうを見ながら、向こうは今こういう問題を考えていて、その問題は日本ではどこにつながるかということです。

——自分の世界に置き換えてみる。

池上 比較してみても、日本ではどうかたちかを考える。要するに、世界史は全部同じで、地域によって表れかたが違ふということですから、どのように表れるのかを探るべきなのです。人間なんて、大体、白人だろうが黒人だろうが同じで、世界史で資本主義が貫徹しているように、同じだということです。別に人種が存在しないとか、そういう話ではありません。

——ただ、ちょっとした差異、ズレが生まれているかですね。

池上　ズレがあつて、なかなか、ズレは埋まりません。

——ズレは小さくもあり、時として、大きいんですね。

(二〇一四年八月二〇日
新宿 喫茶ルノアール)